

京都の町は荒れ果て、羅生門はいつからか、
 死体の置き場になっていた。ここでひとつ確
 認しなければならぬことがある。舞台とな
 る羅城門は京都の表玄関である。とくに羅城
 門と朱雀大路を挟んだ西寺と東寺は、風水的
 には都を守る重要な拠点である。当時の荒廃
 した様子が伝わってくる。
 楼の内には幾体もの死体が置き去りにされ
 ている。人間のことよりむしろ生き物の残
 骸と表現した方がふさわしい。これから迫ら
 れる選択の関頭に相応しい場所である。
 そこで下人は檜皮色の着物を着ている老婆
 と出会う。檜皮色の着物は、元からその色で
 はなかったはずだ。死体の血が染みついてそ
 のような色になってしまったのだろうか。老
 婆の垢が染みついて変色してしまったのだろ
 うか。いずれにしても老婆の荒んだ生活を象
 徴している色として描き出されている。
 老婆は放置された死体から、髪の毛を抜い
 ている。死者に対してこのような行為をして

いる老婆を下人は問いつめる。盗人になるの
 をとどまらせている良心からだった。
 「この女は蛇を干し魚と偽って売った。だが
 生きるための術なのでしかたがない。だから
 わたしの手をしていることも、この女は大目にみ
 てくれるだろう」。老婆の理屈だった。
 この話を聞いた下人の良心は堰を切ったよ
 うにある方向へ向う。文中では「勇気」と表
 現されているが、生きることへの選択である。
 「おまえがしているようにしなければ、俺が
 飢え死にする」と、檜皮色の着物を盗み取っ
 てしまう。この瞬間から、下人は生物として
 生存を選択することとなる。
 生物は「生きるためには無様なまねをして
 でも生き延びる努力をする」と聞いたことが
 ある。地球の環境が変わると、形態をも変え
 てしまう。隕石の衝突で地上が灼熱地獄とな
 れば、姿を変えて地下へ、深海へと避難する。
 そして、何千万年もの間そのときが来るのを
 待ち続ける。

生きるというのはわたしたちが考えている
 以上に、グロテスクで懸命なものなのかもし
 れない。後天的に身についた「盗みはいけな
 い」という常識がどれだけの重みを持つのか
 生物として生きるか死ぬかと選択を迫られた
 ならばわたしには答えることはできない。
 「下人の行方は、誰も知らない」で、『羅生
 門』は終わる。もしもこの一文が、「下人は
 役人に捕まり、強盗の廉で処刑された」や、
 「盗人である自分の中にいまだ存在する良心
 と葛藤しながらも、下人は最後には善人にな
 った」では、これほどまでに生きるとはどう
 いうことなのかとわたしは考えただろうか。
 何とも言えない憂鬱な余韻が残っただろうか。
 芥川龍之介は三十五歳で自殺する。命と引
 き替えに書き続けたのかもしれない。生きる
 本能をも凌駕してしまう芥川龍之介の創作活
 動の凄まじさに鳥肌が立つような気がする。
 命の代償のひとつが『羅生門』最後の一文で
 あるように思えてならない。